

ラ・フォンテーヌの寓話

—— 朗読文学のために —— 関口存男

わたしは、實は「朗読文学」というものに興味を持っていて、なにか大きな聲で多数の聴衆に読んできかせるような文学が起らなければならないと思っている者ですが、その見地から、最も実行し易いものの一つとして、たとえば佛蘭西古典文学中の有名な、ラ・フォンテーヌの寓話などを推したいと思います。

ラ・フォンテーヌは、今から約三百年前、即ち十七世紀の人で、例のモリエールやラシーヌなどと同じ頃の文豪、その寓話集は、大部分はイソップ物語と同じ話ですが、その扱い方が当時の佛人の氣持に合って、現在に至るまでもモリエールの喜劇、ラシーヌ、コルネイユの悲劇と同程度に人口に膾炙しているだけではなく、學校の教科書中に入入れられる量から云えば殆んどラ・フォンテーヌに勝る文豪は佛蘭西はおろか、佛蘭西以外にも無いでしょうから、暗誦用の題材になるという意味では、これこそ本當に文字通り人口に膾炙した作家というべきではないでしょうか。

ラ・フォンテーヌの寓話は非常に洗練された詩文から成っていますので、本當に佛人たちが面白がるように面白く味わうには、勿論佛文のままではなければ意味を成さないわけで、翻譯などしたところで、何が面白いのか全然わけのわからぬものになってしまうのは當然です。筋はわかるかも知れませんが、面白味は筋ばかりではなく、むしろ一行、一行、一言一句が面白いのですからそうした面白さは、一字一字直訳などした日には、たとえば「古池や蛙飛び込む水の音」を、「古いお池の中へカエルがとび込んで水がドブンと云った」と変えたようなことになってしまうでしょう。以下、三つばかり実例をお目にかけますが、「蛙が飛び込んで水がドブンと云った」式にならないように、直訳を避け、意に忠にして語には必ずしも忠ならざる表現法を採ることに致します。

蟬と蟻

せみせみせみと、蟬さんは夏ちゅう歌っていましたが、
さて木枯しが吹き出すと、食べて行けなくなりました。
どこをどんなに探しても虫けら一匹おりません。
そこでとうとうお隣の蟻に無心を云いました。

「蟻さん、まことにすまないが、この冬越すのに困るから、
お米を一粒かしとくれ。何としてでも九月には
利息をつけてかえすから、どうぞたのむ。」と云いました。

すると蟻さん、よし來たと云って貸すかと思いの外、
「いったいあんたは夏のうち毎日なにしていなすった。」

「何していたとて……暇だから歌を歌っていたきりさ....」

「歌を歌っていなすった？へーえ、そいつはよかったね、
じゃあまあこんどは踊りでも踊っていなさい、さようなら。」

朗読文学という見地からは、此の蟬と蟻のような簡単なものも勿論簡単なものに特有な面白さがありますが、それよりももっと注目しなければならないのは、やや複雑な構造を持った寓話です。即ち、面白おかしく読み上げるためには、多少大規模な、劇的構造を持っていると、ちよつとした所で非常に効果がちがってきます。たとえば次に挙げる「お寶と二人の男」などがその一例ですが、落語家と講談師とを兼ねたような調子で物

語ってきかせたら、必ず相當の劇的効果を収めることができます。これも、勿論「かえるが池の中へ飛び込んだら池の水がどぶんと云った」ではありませんから、多少自由な改修はしてあります。

お寶と二人の男

むかしむかしあるところにひとりの男がありました。
男はあったが此の男、お金はありませんでした。
お金がないから貧乏で、貧乏だから金がなく、
あるものはただ借金と、廻らぬ首と、溜め息と、
やけくそばかりでありました。
何もないとは云いながら、これだけあれば大したもの、
なおそのほかに麻縄の丈夫なやつがあったので、
こいつで首をくくろうと、とある空屋に忍び込み、
その麻縄を天井の梁にゆわえて首を懸け、
ブランと身体を釣りますと、釣ったとたんにバリバリッと
梁が折れたと思ったら、天井裏からドッスンと
大きな箱がおっこちて、金貨銀貨がバラバラと
部屋一杯に散りました。

「コリヤ首くくらんで好かったわい、イヤ、首つって好かった……」と、
男あわてて掻きあつめ、箱を小脇にかい込んで、
風をくらって逃げ出した。
すぐそのあとから持主が飛び込んできて「アレーツ」と
叫びも敢えず腰がぬけ、ウーンと悶絶しましたが、
やがてのことに正氣づき、さては夢ではなかったか、
やっぱりほんとに盗まれたか！
世間は闇だ！してみると神も佛もないものか！
いやモウいよいよこうなれば神も佛も要ることか、
幸い此處に縄がある、この縄一つでたくさんだ。
今この首をくくらねばまたとくくれる時はない、
くくれる時にくくらねばだいいち縄に面目ない
何に未練もないけれど縄にや未練があるんだ……と、
モウこうなると滅茶苦茶で、その麻縄を天井の
梁にゆわえて首を懸け、ブランと身体を釣りますと、
こんどは天井も毀れずに首尾よく首が釣れました。

最後に一言附言して以て弔詞に代えますが、
いったいドウモこの人は溜めるのだけが道樂で、
天井裏のおたからは役に立たない金でした。
役に立たないお寶が役立つ男の手に渡り、
要らなくなった麻縄が要る人の手に入ったのは、
これも物々交換で、有無相通じたわけでしょう。

最後に一つ、うんと長いのをお目にかけましょう。ラ・フォンテーヌの原文は別に長くはないのですが、こんどは、ほんの荒筋だけを探って、細部の経緯を全部日本式に創り直して見ます。実際ラ・フォンテーヌの寓話の或るものは、よく親しんでいるとそういう創作欲を刺戟するのです。だから翻訳として見られると困るが、ラ・フォンテーヌの寓話を朗読文學の見地から利用するとかいう事も出来るという一例をお目にかけるわけです。ラ・フォンテーヌを紹介するという目的には多少添わないかも知れませんが、わたしはどうも例の「古いお池の水へ蛙がとび込んだら水がドブンと云った」が非常に嫌いなので、むしろこうした創作みたいなものの方が、本當の意味に於ては、ずつと本當の紹介になりはしないかと思うわけです。

犬 小 舎

あるときのこと、臨月のお腹をかかえた牝犬が
どこでお産をしようかと、場處をさがしておりますと、
あるお邸の玄関にペンキを塗ったハイカラな
小さな小舎があったので、覗いてみると藁もあり
食器もあるのでよろこんで、「オヤオヤ、これは丁度よい、
わたしも實はかねてからたとえ七とこ借りをして
七とことも踏みたおしても、犬と生れて来たからには
一度はこういう犬小舎に住んでみたいと思っていた、
お産はお産で別として、お産の後も、コリヤいっそ
此處で住もう……」と云いながら、ハ、よいとこせと横になり、
庭を眺めて、しみじみと「夏になった……」と云いました。

「夏になったもねえもんだ、いけ図々しいスベタめが、
無斷で人の留守中にのさばり込んで來やがって！
あんたはいったいどこの人？」
言われて顔をあげますと、番犬らしい眞白な
いきなすがたの牝犬が窓からのぞいておりました。

「あらマア、どうもすみません、いえナニ、ちよっと此の前で
めまいがしそうになったので腰をおろしたばかりです、
臨月なので……」と腰をあげ、「まことに失礼しました」と
あやまりながらおとなしく出てゆくすがたがあまりにも
しおらしいので番犬はつい氣の毒になりまして、
ほんのひとことお愛想にやさしい言葉をかけたのが
そも過ちの第一歩、この一言さえなかったら
おのが棲家を奪われて路頭に迷うというような
目には遇わずとすんだのです。
いったい女の過ちはすべて口から出るもので、
犬の社会も此の點は人間社会と同様です。
お愛想にせよ何にせよ、女同志のひとことは
多くの場合二言で、その二言は三言ゆえ、
四言になるのは当然で、五言六言はベラベラと
七言八言に発展し、「アラもう何時頃でしょう、
どうもお邪魔をしました」とお辞儀をしてまたひとしきり、
そのひとしきりがサア長い！とうとう晩になりました。
ところが廣い世間には晩になっても帰らない
お客がたまにはありますが、
今日のお客はお相憎そういうお客だったので、
ウンザリしながら夕飯の仕度にかかると、
此のお客産氣がついたと言いはじめ、
さあモウ大變、さするやら押さえるやらの大騒ぎ、
そのうちヤット産みおとした仔犬がなんと十二匹！
クンクン、ケンケン、キャンキャンと、いやモウ、どえらい騒ぎです。
「マア御安産でおめでとう、ではモウ早速出て下さい、
はいサヨウナラ」と簡単に、ほり出すわけにも行きません。
一晚とめてまた一晚、また一晚とたつうちには、
「すみませんね」と事毎に言っていたのが言わなくなり、
四日目五日目あたりには、あんまり子供がうるさいので、
ひとつは親へのあてつけに、表で寝ようとしかかると、
「こちらに場所がありますよ、ちらかっているんだけど

およろしければどうぞ……」などどっちが主人かわからない
妙な話になりました。

いったい女というやつは、なにか氣にくわなくなると、
決して黙っちゃおりません。「わたしは氣にくわない」という
示威をはっきり致します。ところが示威と解決は
別問題でありまして、解決しようと思ったら
示威をやらない方がよく、示威をやろうと思ったら
解決しない方が好い。だってそういうわけでしょう？
奥さん連中、どうですか！
女は示威がしたいので、解決したくはないのです。
ほんとに解決したいなら、余計なことは云わないで、
今からすぐに出てくれとひらき直ってしまえば好い、
酔のこんにゃくのとぬかしたら、仕方はいくらもあるわけで、
たとえば近所の雄犬を引っぱってきて、腕づくで、
親子合せて十三匹、一匹一匹順々につまんで出せば好いわけです。
ところがそうはしたくない、なぜそうしたくないのでしょうか？
それは即ち、そうすると事件が「解決」するからで、
女は事件の「解決」を望むのではなく、あべこべに
とにかくなるべく厄介にこみ入ることを望みます。
望むわけでもなかろうが、結果を見るとチョットまあ
そういう形になるのです。
こうなるとまあ要するにつまりは趣味の問題で、
批評はできないわけですが、しかし皆さん、どうでしょう、
御婦人趣味というやつは随分しっこい、ややこしい、
うるさい趣味ぢやないですか！

要するにです、此の牝犬なすべきことは何一つ
爲さないでいて、その代り、向う三軒兩隣、
背中合せの犬にまで、「まあ聴いてくれ腹が立つ、
こういうわけだ」と居直って、さながら當の本人に
直接談判するように、とにかくえらい鼻息で
饒舌って廻ったものですから、こんどは相手が承知せず、
そういう風に云われてはわたしの立場がなくなる、と、
これまた示威を開始して、向う三軒兩隣、
背中合せの犬どもにある事ない事つきまぜて
此處を先渡と逆宣傳、するとこういういざこざに
必ず一役買ったがる何とかさんが飛んで出て
あっちやこっちを掻き廻し、いよいよ以て問題を
紛糾悪化せしめるなど、いろいろ事件が派生して
結局どっちが悪いのかわけのわからぬ事になり、
仲裁役をたのまれた年寄犬もあたまを掻き、
「そうですねあ……」と云ったまま苦笑いしていましたが、
そのうち遂に或日のこと、本人同志が衝突し、
「家を出てくれ」、「いや出ない」、「いや出ろ」などということに
なって來たので仲裁役、

「双方ともに言い分が おありになるからコリヤちよっと
そう簡単には裁けぬが、いずれにしても或点で、
妥協をしてはどうですか。
あなたの方も大勢で割り込んでいる立場ゆえ、
なんと理屈をおっしゃっても、喧嘩となれば分がわるい、
いますぐにとは云わないが、なるだけはやく立ちのいて、

お礼のひとつもした方が、人のところにいつまでも
厄介かけているよりは気持ちが好いぢやないですか。
しかしあなたもあなたです、せっかく今日まで親切に
面倒をみておきながら、今さら急にばたばたと
追い出したのでは、これまでの好意がすっかり水の泡、
それに気持ちわるかろう。ながくと云はぬ、マアせめて
仔犬が立派にそだつまで氣よく置いてあげなさい。
犬の子だからわけはない、三月もたてば一人前、
そうなりゃわたしが立會って、みんなの前で出てもらう。
どうです、異議がありますか？異議がなければ大体まあ
そういうことに決めましょう。」

「いやもう出てくれさえすれば文句はない」と云うわけで、
そういうことに決めました。

けれども、なにしろ犬の仔が十二匹いて騒ぐので
小舎の中にはいたたまらず、あっちやこっちへ避難して
仔犬が大きくそだつのをしばらく待っておりますと、
仔犬は立派にそだったが、出て行く気配は見えません。
そこでいよいよ口利きの年寄犬を先に立て、
向う三軒兩隣、背中合せの犬どもを
総動員して出かけたら、向うはなにしろ十三匹、
ちよっとこちらの二倍です。
追いだすどころの騒ぎぢやない、逆にこっちが追い出され、
尻尾をまいて総退却、騒ぎが一應しずまると、
小舎の中では親犬が、「ああ邪魔くさい、此の邊は
ずいぶんうるさい近所だこと。ハ、よいとこせ」と横になり、
庭をながめてしみじみと「秋になった……」と云いました。

(芸苑 第四巻・第一号 昭和二十二年一月号掲載)

フォンテーヌ翻案 関口存男

驢馬を賣りに行く話

昔々ある所に爺と孫とがありました。
ある時ロバを売るために町へでかけて行きました。
賣り物ですから、なんとかコウ元氣な所を見せようってんで
歩かせないで、四足を一つにまとめて縛り上げ、
逆さに釣して棒に掛け、
ワッショイ、ワッショイ、ワッショイ、ワッショイと
担いで家を出ましたが、おどろいたのは村人ども、
『おいおい、氣でも狂ったのか、どうするつもりだ、川へでも
捨てに行くのか、殺すのか?』『イヤイヤ別に殺しはせぬ、
川へも捨てるわけじやない、町まで売りに行くところだ』
『売りに行くのにおまえさん、せっかく足のあるものを
かつぐと云う手はないでしょう。あんた方にはウツカリと
リヤカーなんか貸せないね。ゴム輪を外して其の傳で
ワッショイ、ワッショイ、ワッショイと
担がれたんぢや叶わねえよ！車にひずみが来るからねエ！』
言われて見れば爺さんも成る程そうだと気がついた。
そこで一息入れたのち繩をほどいて其の驢馬を
二人で追って行きますと、やがて途中で行き合った

すこぶる性の悪そうなどこかの婆アが言いました。

『ヤレヤレ、マアマア、ホントになあ……』

長生きするといろいろと變ったお方に逢いますわな。
よくマアこんなにお目出度いお方がそろったものぢや喃[のう]。
せっかく 驢馬を連れながら、乗りもしないでノコノコと
後からついて行きなさる！あきれたもんぢや。御らんなさい。
後からバスがやって來た。どうです！何ならあのバスの
うしろに附いて走ったら？デーと走ってごらんなさい！
なかなか骨が折れますよ。そうして向うへ行きついたら、
車掌にお錢を払うんだね。
なんだか一向わけのわからんような顔をしていなさるが、
それはつまり物のたとえなんだよ。
お二人さんで其の驢馬のうしろについてノコノコと
歩いて行ってその上におまけに餌まで食わせてやるのと
おんなじこっちゃ』

と此の婆さん言いたい放題言ったのち、
『ハイさようなら』とお辞儀して横丁へ曲ってしまいました。

斯う云う風に言われるとなるほどそうに違いない。
『ではおまえでも乗るんだな』と爺さん孫をロバに乗せ
自分は轡を手にとってしばらく路を行きますと
野良に出ていた百性が聞こえよがしに獨りごと、
『ショのねえ野郎だ、あの餓鬼アは！
どけえ行くだが知んねえが、大きなくせしてスーヌーと
手前ばかりが樂をしてヨボヨボ爺を歩かせて
おまけに轡を取らせるたア
アンちゅう仕様のねえ餓鬼だ！
いったい學校の先生はああ云う事を教えるだか？
それともああ云う事がハア近頃流行りのデモクラだか?』
こう云う風に云われては子供心に恥かしく
乗つておれなくなりまして、『爺ちゃん、僕は歩くよ』と
とうとう泣きべそかき出して孫は驢馬から降りました。
『誰が乗ろうと同じだのに、うるせえ事をぬかしやがる、
ヨシ、そんならわしが乗る！』

こんどは爺いが乗っかって行こうとするとうしろから
これまた何處かの爺さんが、追つついて來て、少年の
頭をやさしく撫でながら、『お孫さんか?』とききました、
『ええそうです』と云いますと、『可哀相に!』と此の爺さん、
二人をジロジロ見くらべて時々溜息つきながら、
ポツリポツリと何だかコウ氣持の悪い、アイマイな、
おかしい事を申します。
ハッキリ云ってくれないから詳しいことはわからんが、
要するにマア、誰だって孫ほど可愛いものはなく、
たとえ世間に笑われても孫には樂をさせようと
考えるのが人情だ、それにあんたの爺さんは
自分がロバに乗っかって孫をしょぼしょぼ歩かして
涼しい顔をしてござる、あきれたもんぢや……とまあ大体
そう云う意味のことらしい。
だんだん相手の云う意味がわかって來ると爺さんは
乗っておれなくなりまして、黙ってロバから降りました。
すると相手の爺さんは、『エヘヘ』と笑って『こりやどうも、
悪い事を言つてすまんのだ、マアマア乗ってござらんしょ、

エッヘッヘッヘ.....』と云いながら、どんどん行ってしまいます。
後に残った爺さんと孫は途方に暮れました。
サア、こうなると後はもう二人で乗るしか仕様が無い。
それでは二人で乗ろうかと、二人で乗ってみました、
乗ったとたん気がつく、すぐ目の前の路ばたに、
青年會の若い衆が大勢詰めておりまして、
なんだか馬鹿に叮嚀にビラを一枚呉れました。
見ると『動物愛護デー、農村漁村の皆様方、
牛馬を愛護致しましょう！』

書いてあるから仕様が無い、あわてて驢馬を降りました。

サアモウ、いよいよこうなるとが何だかわからない。

流石に気の好い爺さんも到頭怒り出しちやった。

『黙つて聞いてりゃ方図もない

勝手な事をぬかしやがる！

ナナナナナナ何だとバカヤロウ共めが！

爺が乗るのも違ってる、孫が乗るのも宜しくない、

二人で乗るのは猶不可ん？乗らずに歩けば馬鹿野郎、

擔げばなおさら間抜けだと？それじゃあ一体どうするのが
本當なんだバカヤロウ共め！

驢馬と孫とが此の爺におぶされとでもいうわけか、

それとも孫に此の爺と驢馬とが乗っかるわけなのか？

それとも子供を縄でつるして爺とロバとが担ぐのか？

それとも爺をブラさげて孫と驢馬とが擔ぐのか？

乗っかりもせず担ぎもせず、

歩きもしないで歩かれるかバカヤロウ！

サアモウ何とでもぬかせ！云いたいことを官わせてやる！

わしの方でも其の代りやりたいことをやるきりだ。

わしに氣兼ねをさせたけりや世間もわしに氣兼ねしろ、

指図をするのは勝手だが、ついでに尻も拭いとくれ。

尻まで拭けぬと云うのなら、指圖もしないでおいとくれ！